[オロリン]

ORORIN

公立大学法人島根県立大学広報誌 ―― vol.10 2019.3 ―― 地域と大学の交流誌

p.2–4

ヘルスサポートプロジェクト

――歌って踊ってエクササイズ！

@海士町&知夫村

p.5-7

国際交流と情報発信に挑戦

カケハシ・プロジェクト参加学生座談会

ORORIN
［オロリン］

ヘルスサポートプロジェクト

―歌って踊ってエクササイズ！
@海士町&知夫村

［イラスト］本間千裕

ヘルスサポートプロジェクトは、島根県立大学看護栄養学部の吾郷美奈恵教授と学生有志が、隠岐郡海士町と知夫村で 2018 年 11 月から 2019 年 3 月にかけて実施した健康づくり支援活動です。音楽と映像に合わせて、歌って踊るエクササイズができる「JOYBEAT」を使い、エクササイズ指導を行いました。

1 プロジェクトを立ち上げる

海士町では、まず教育委員会教育長・平木千秋様と打ち合わせ。吾郷教授と学生が企画の趣旨を説明すると、親身になって相談に乗ってくださいました。エクササイズに適した場所の紹介や、地域の方にプロジェクトを周知する方法などのアドバイスまでいただきました。

2 エクササイズの準備

いざ本番！ 学生はエクササイズを始める前に、参加者の特徴に合わせてエクササイズの難易度を調整。子どもやお母さん、ご年配の方まで参加者は様々です。必要な運動の強度を考慮しながら、工夫してプログラムをつくりました。

3 コミュニケーション

段々と、エクササイズの雰囲気づくりも上手になってきました。ただプログラム通り進行するだけではなく、途中で参加者に声をかけるなど、コミュニケーションを図りました。回を追うにつれて、いっそう明るいムードになっていきました。

4 ふりかえり

全八回のエクササイズの最終回は、和気あいあい。意見交換会も実施しました。「運動不足が解消された」、「音楽に合わせて楽しく身体を動かせた」といった声が。海士町の皆さん、知夫村の皆さん、本当にありがとうございました！

公衆衛生看護を学び、健康づくりと地域づくりを目指す

――働きながら大学院で学ぶ

戸谷 紗嘉
（島根県松江市出身、看護学研究科博士前期課程一回生）

「公衆衛生看護を学べば、社会の仕組みが見えてくるのではないか」。そう力強く話してくれた戸谷さん。市役所で働きながら、島根県立大学大学院看護学研究科で学んでいる。

「公衆衛生看護」とは、地域社会のなかで人々の健康増進を目指していく学問。医療や看護の専門知識を踏まえた上で、人々の健康を支える社会の背景まで考えられるところが、この分野の面白さだという。

小さい頃から看護師志望で、島根県立大学看護学部（現・看護栄養学部）に進学した。進学の際には、特に救急医療の現場で働くことに興味があったという。しかし、大学で学ぶにつれて、行政や企業、学校のなかで病気予防や健康の保持・増進に取り組む「保健師」の仕事に惹かれるようになり、三年次に保健師コースを選択した。

大学卒業後は保健師として働くことを考えていたため、働きながら大学院に通うという現在のキャリアは自分でも想像できなかったという。しかし、保健師を取り巻く環境の複雑さや求められる能力の高さに悩むなかで、大学院に挑戦してみないかと誘われ、この進路を選択した。

そんな戸谷さんは、今春から島根県隠岐郡知夫村で保健師として勤務しながら、修士論文を書き上げ、大学院修了を目指す。「地域の方々が健康でいられるためのサポートやきっかけづくりがしたい。地域のつながりを活かして、多様な人や文化を受け入れながら、健康と地域づくりの発展に貢献できる保健師を目指す」と彼女は語った。

（インタビュー・構成：福間桃華、瀬下翔太）

戸谷さんが大学院進学を決めるキッカケをつくった、公衆衛生看護学を専門とする吾郷美奈恵教授（島根県立大学大学院看護学研究科）。

しまねの文化をハワイへ！

――カケハシ・プロジェクト

ORORIN［オロリン］

二〇一八年十二月九日から十六日にかけて、島根県立大学の学生十一人がハワイに出向き、島根の文化を伝える活動を行いました。このプロジェクトは、外務省が推進する対日理解促進交流プログラムのうち、特に北米を対象とした「カケハシ・プロジェクト」に島根県立大学が採択されたことで実現しました。国際交流と情報発信をテーマとしたこの活動の様子をお伝えします。

discussion

［ハワイ×しまね］国際交流と情報発信に挑戦

――カケハシ・プロジェクト参加学生座談会

青木萌華（看護栄養学部二回生）、
石田菜々美（同二回生）、
吉武佳音（同二回生）
（インタビュー・構成：新垣美優、
石本千晶、瀬下翔太）

カケハシ・プロジェクトに参加した看護栄養学部の三人の学生に、ハワイで行った国際交流や情報発信に関する活動について聞きました。島根県の文化や伝統を学び、英語で伝える。その過程でどのような気づきや学びがあったのでしょうか。

――カケハシ・プロジェクトに参加しようと思った理由を教えてください。

石田　ずっと国際交流に関心があり、これまでも韓国や北東アジアで現地の方々と交流するプログラムに参加してきました。そのため、今回もぜひとも参加してみたいと思いました。

青木　私の場合は、いままで海外に行ったことがなかったので、まずは実際に行ってみたいという気持ちがありました。また、「島根県のことを海外の方に発信する」という目的にも惹かれました。

吉武　私もです。海外に行って自分が異文化を教わることと、海外の方へ島根の歴史と文化を伝えること、どちらにも興味がありました。

◉しまねを知る！

――島根のことをハワイで伝えるためにした準備や、そこから学んだことを教えてください。

青木　私たちは、石見神楽や小泉八雲、出雲大社について調査しました。私は八雲の怪談話をハワイの若者の前で英語で披露するグループに参加していたので、八雲について特に深く調べる必要がありました。

吉武　調べていくうちに、日本文化のなかには島根発祥のものがいくつもあると気付かされて、ますます島根県が好きになりました。

石田　海外に関心があった反面、自分たちが暮らす島根の良さについては、あまり考えたことがなかったと気づかされました。昔ながらの文化や伝統がいまも残っているところが島根県の良さだと思います。

◉しまねを伝える！

――ハワイの高校生や大学生たちとの交流や、情報発信の際には、どんなことを心がけましたか？

石田　学生の前で小泉八雲の怪談話を発表するとき、声のトーンを一定にしたり、怪談らしい雰囲気を演出したりといった工夫をしました。ただ、英語力にまだ自信がなく、発表を暗記する必要がありました。もっと考えながら聞いたり話したりできたら、より相手に発表が深く伝わったと思います。

吉武　日本独自の文化を英語で伝えることに苦労しました。そのため、動画や実演など、いろいろな方法に取り組みました。手応えがあったのは、ハワイの大学で空手について説明する際、実際に演武してみせたことです。終わった後、たくさんの拍手をいただき、日本に行くときは是非また空手を見たいと言ってもらうことができました。

石田　私はインスタグラムやフェイスブックといったＳＮＳ（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を活用して、インターネット上での情報発信に取り組みました。英語と日本語の両方で書き、文章も試行錯誤しました。「いいね」を増やすことができた反面、内容がどこまで伝わったかはわからない部分もあったので、今後の課題かなと思います。

青木　一緒に語らったハワイの学生たちや一緒に参加した山形大学の方々と、いまでもＳＮＳでつながっています。出会った方々との交流を、これからも続けていきたいです。

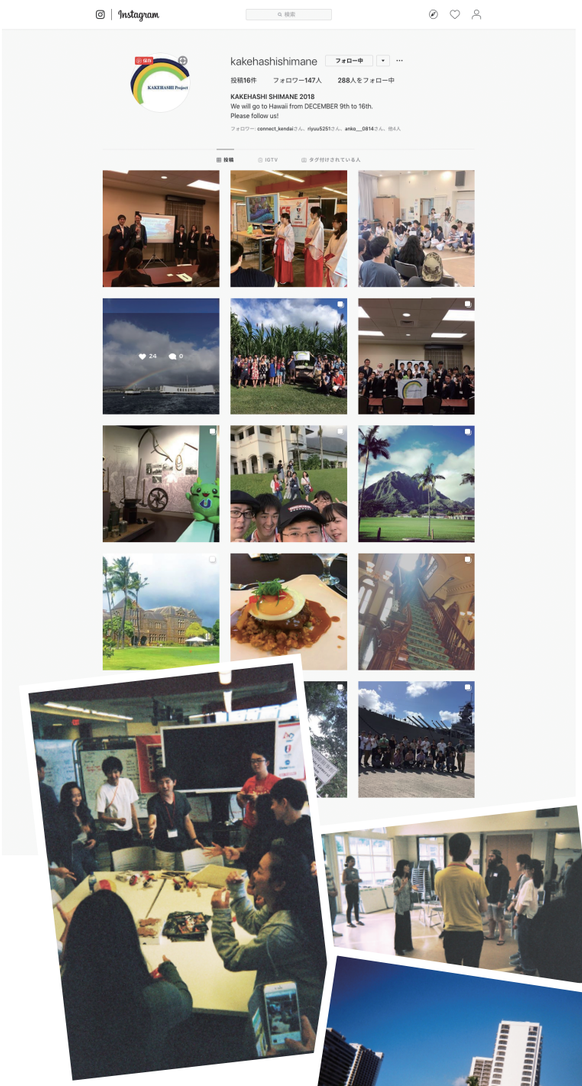
◉看護と国際交流

――研修での経験や成果を、今後の学びや活動にどんなふうに活かしていきたいですか？

青木　大学の授業で、相手の生活を知ることが看護においてはとても大切だと学びました。島根の伝統的な文化にたくさん触れることができました。今回学んだことは、将来自分が島根で看護師になって、患者さんや地域の方々とお話するときに役立つと思っています。

吉武　それから、相手を知ることに加えて、自分を知ってもらうことの大切さも感じました。海外の方に自分たちのことを伝えられるように、今後も国際交流や情報発信の機会に積極的に参加したいと思います。

石田　私はコミュニケーションツールとしての語学をもっと磨いていきたいと思うようになりました。英語を喋れる看護師になって、県内に住む外国人や海外からの旅行者が医療を受けるときに役立てたらと思います。



写真：古崎智香（総合政策学部四回生）、川田芽生（同三回生）、舩越郁純（同二回生）、島瀬光理（同一回生）、戸田秀典（同一回生）、眞鍋聖位那（同一回生）、水野一輝（同一回生）、吉岡唯（同一回生）

column 1

ヘルスケアプロジェクトを取材して

――他分野の学生から学べること

隠岐でヘルスケアプロジェクトを取材した、編集部の福間桃華（総合政策学部二回生）に話を聞いた。彼女は、看護栄養学部の学生たちが看護という専門的な学問分野から地域にアプローチして、自分たちで主体的に行動する姿が印象に残ったという。また、大学院生の戸谷さんへのインタビュー（4ページ）では、周りに囚われず夢に向かって進んでいく生き方に触れ、自分の目標だと思うようになったそう。

実は福間にとって、取材をしたのは今回が初めて。広報誌の活動を通じて、地域の方々に大学生の活動を「知ってもらう」ことを目指すと話す彼女は、他分野を学ぶ学生の姿が大きな刺激になったようだ。

（本間千裕）

column 2

誰かに向けてつくる

――編集部：本間千裕に聞く

前号から本誌の取材や原稿執筆、イラスト制作を担当している本間。制作に関わっていて嬉しくなる瞬間はどんなときか尋ねてみると、「自分のつくったものを見た人が、喜んでくれたとき」という言葉が返ってきた。

「喜んでもらえるように、つくりはじめる前に丁寧にヒアリングしたり、その場でサッとスケッチを描いてみたり。自分と相手のイメージをすり合わせながら制作を進めるよう心がけています」。どれも簡単なことではないだろう。けれども、彼女はこうした制作プロセスが一番楽しいのだと話してくれた。責任感と楽しみを持ちながら制作に取り組む姿勢が印象的だった。

（瀬下翔太）

島根県立大学未来ゆめ基金への御協力に心よりお礼申し上げます

『島根県立大学未来ゆめ基金』につきまして、平成29年11月1日から平成31年2月28日までの間に、下記のとおり個人99名、法人・団体等56名の皆様から総額4,069,000円のご寄附をいただきました。皆様のご協力に厚くお礼申し上げます。ご寄附をいただきました皆様に感謝し、ここにご芳名を掲載させていただきます。

【個人からのご寄附】赤木 保江、飯塚 潤、家本 賢、石倉 一憲、石崎 達郎、今岡 泉、上野 正、宇原 均、江川 慎司、大石 宗男、大本 真美、岡田 喜朗、小川 義弘、小畑 芳夫、落部 章二、勝田 艶、木村 正典、清原 正義、黒崎 信夫、黒澤 さつき、小池 律雄、上代 勇夫、髙松 哲也、武上 起敏、竹田 隆、田房 健二、冨田 伸弥、中尾 れい子、長岡 なつ子、中村 勝輔、中本 博之、西村 敏明、西本 一夫、橋本 英治、長谷川 勝章、原 恭子、藤山 浩、堀江 英政、横野 康一、松村 憲樹、松本 一雄、三島 章利、宮川 勉、村上 謙二、村上 昭三、森 フミコ、安井 裕久、山崎 祥、山本 チス子、吉本 晃司

【法人・団体等からのご寄附】イマックス株式会社、大石税理士事務所、御料理仕出し処さとう、株式会社伊原組、株式会社岩多屋、株式会社イワミツアー山陰支店、株式会社えすみ、株式会社大川清風堂、株式会社オープンハート、株式会社オリジナル、株式会社コニシ、株式会社三維、株式会社バイタルリード、株式会社はらぶん、共立商事株式会社、山陰アイホー調理機株式会社、山陰酸素エンジニアリング株式会社、島根県体育用品株式会社、島根県民共済生活協同組合、島根電工株式会社、松栄印刷有限会社、神州電気株式会社、新和設備工業株式会社、セコム山陰株式会社、浜崎タイプ販売有限会社、浜田ガス水道工事株式会社、浜田ビルメンテナンス株式会社、浜田ワシントンホテルプラザ、ホクサン厨機株式会社、北陽警備保障株式会社、松江土建株式会社、まるなか建設株式会社、三菱電機ビルテクノサービス株式会社、有限会社黒潮社、有限会社スサノオ観光、有限会社友田大洋堂、有限会社ナイチンゲール、有限会社ナガサコ印刷、有限会社原印刷、有限会社丸嘉土建、有限会社みずほ楽器、有限会社夢工房

※五十音順、敬称略
※ご寄附をいただいた皆様の中で、ご芳名の公開を希望されない方につきましては掲載しておりません。
※申込書は本学ホームページにも掲載しておりますが、郵送もいたしますのでお問い合わせください。事務局財務課（TEL：0855-24-2218）

読者プレゼント

ご意見・ご感想をいただいた皆様の中から抽選で、本号にて特集した出雲キャンパスのある出雲地域にちなんだプレゼントを10名様に差し上げます。ご意見は、ハガキまたはメールにてお寄せください。
※当選者のお知らせは発送をもってかえさせていただきます。
※応募締め切り：
2019年6月27日（木）必着

■応募先
ハガキ 〒697-0016
島根県浜田市野原町 2433-2
島根県立大学企画調整室
広報誌オロリン事務局
e-mail kikaku@u-shimane.ac.jp

2019年3月29日発行 ［発行］島根県立大学 企画調整室 ［編集長］瀬下翔太 ［学生編集部］新垣美優、石本千晶、礒野千華、浦島扶希、徳竹千春、中野杏子、錦織海音、福間桃華、本間千裕、益田真里亜 ［ディレクション］宮武優太郎 ［デザイン］太田知也 ［写真］石本千晶、太田知也、中野杏子、徳竹千春、福間桃華、宮武優太郎
［お問合せ］島根県立大学 企画調整室 0855(24)2201 〒697-0016 島根県浜田市野原町 2433-2 http://www.u-shimane.ac.jp/